

進行性多巣性白質脳症 -基礎と臨床の架け橋となる研究-

① 共同研究・産学連携への意気込み



准教授
穴戸 由紀子

進行性多巣性白質脳症の早期診断を実現し、病態解明と正確な予後評価を目指しています。

② 想定される連携先・移転先

多発性硬化症や膠原病の臨床を行っている施設、神経系の画像診断に力を入れている施設、免疫系に作用する薬剤を扱っている企業など

キーワード

進行性多巣性白質脳症(PML)、JCウイルス、脳生検査、MRI画像診断、免疫再構築症候群 他

研究内容

進行性多巣性白質脳症(progressive multifocal leuko-encephalopathy; PML)は、JCウイルス感染による脱髄疾患です。JCウイルスは、人口の大半に潜伏・持続感染し、免疫能の低下した宿主において再活性化し、重篤な脱髄脳症をきたします。かつてはAIDSの合併症として知られていましたが、近年では多発性硬化症(MS)の疾患修飾薬の他、膠原病などの治療（ステロイドやMTXなど）に伴うJCウイルスの再活性化とPML発症が大きな問題になっています。

AIDS時代のPMLは、亜急性に進行する極めて予後不良な疾患として知られていましたが、多発性硬化症や膠原病患者さんには、PMLを発症しても良好な予後を示す方が多くいることが解かってきました。これは、AIDSと異なり、宿主免疫能が比較的保たれているからだと推測されます。Non-AIDS PMLでは、ウイルス量が少なく、宿主の免疫応答を伴うことが特徴です。

本研究では、PML早期診断と、正確な病態解明・予後評価を目指しています。

